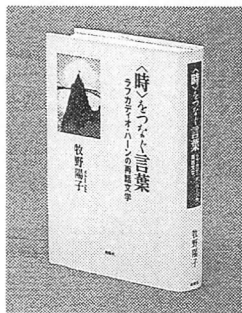


〈時〉をつなぐ言葉

ラフカディオ・ハーンの再話文学

牧野 陽子 著
(新曜社・3990円)



まきの・ようこ
1953年生まれ。成城
大教授・比較文学。
著書に『ラフカディオ・ハーン—異文化
体験の果てに』など。

小泉八雲ことラフカディオ・ハーンの怪談は異国の日本で、日本の「民話」として定着した。その秘密は世間の錯覚と違い、原話が日本の話だからだけではない。西洋育ちのハーンの「雪女」や「耳なし芳一」は日本の類話や原話にない透明な雰囲気を持たえ、晩年の怪談は単なる怪奇趣味の所産ではなく澄んだ深みがある。そう主張する牧野氏はその秘密となる根源的な感覚を探って原話との差異を示した。

本書は、ハーンが奏でた調べにひそむ奥深く広大な響きと、その奏法と

しての革新性を解き明かそうとする試みだが、正確なタツチの演奏を聴くようですががしい。では独創性が少ないかにみえる再話とはいかなる営みだったのか。ハーンの心象世界に一貫するテーマは人間にとって過去現在未来とは何か、という問いで、その答えが「時をつなぐ言葉」としての再話文学だと考える。

そんなハーンの営みを良しとした市原豊太先生に「我一人思ふ心はただ獨り思ふに非ず祖先の心」の歌があるが、その見方を実証した本書は文学分析の範である。牧野

原話を超える響きと深み

氏の言葉は簡潔に研ぎ澄まされ、学術書が芸術作品と化している。

新曜社はほかに二冊ハーン研究を出した。牧野氏はともに浦島伝説にひかれた人としてチェンバレンとハーンを提示したが、大貫徹『「外部」遭遇文学論』は異界や異国と向き合うハーンをロテイヤアルトーと並べて論じた。もう一人、学者として力量のある遠田勝『〈転生〉する物語』は松谷みよ子が採集した雪女伝説が実は八雲の怪談の焼き直しだったことを指摘して、いい加減な民話研究に警告を発している。文学社会学の考察としても秀逸である。

第二次大戦後、米英本位の文学史家がハーンを黙殺した頃と違い、八雲は次第に国際的にも無視できない存在として復活しつつある。日本の外国研究が自己本位になりつつある証左である。

評者 平川 祐弘

(比較文化史家)